

---

## 原著論文

---

協働の場における多元的なライフストーリーの生成：

E.ゴフマンの演劇論的アプローチからの考察

Generating Pluralistic Stories at the Site of Collaboration : A Study based on E. Goffman's Perspective on Dramaturgy

キーワード：

ライフストーリー、ドラマツルギー、役割距離、協働、福島避難者

Keyword：

Life Stories, Dramaturgy, Role Distance, Collaboration, Fukushima Evacuees

東北大学大学院情報科学研究科 佐々木 加奈子

Graduate School of Information Sciences, Tohoku University Kanako SASAKI

---

### 要 約

東日本大震災後に開始された地域情報のアーカイブ活動には、以前から複数の問題が指摘されてきた。これに加えて、近年、多くの震災アーカイブが「あの時、どう避難したのか」という被災上の教訓の伝達に焦点を当てすぎており、その土地に生きた人々の多元的なライフストーリーが省略されているとする指摘が現れた。先行研究の分析は、しかしながら、多元的なライフストーリーの生成プロセスの理論化がまだ十分ではない。佐々木（2016）では、福島県双葉郡浪江町民に焦点をあてて多元的なライフストーリーの生成を実際に試みており、「協働」の場を設定することで、その中での相互行為の中から多元的なライフストーリーが語られうることを実証的に示している。しかし、なぜその結果が得られるのか等は明らかにされていない。本論文では、行為を演技として捉えるゴフマンの演劇論的アプローチの役割概念を用いて、その仕組みを明らかにした。協働の場では、多層的なオーディエンス構造とオーディエンス・パフォーマー間の親密な関係性によって、チームパフォーマンスが促された。その際、参加者たちは自由に自身の役割を見出すことができ、メディアが設定する避難者像から距離を取ることができ、これにより新たな語りの発現に至った。

### Abstract

Archiving local memories online developed by the affected local governments used to be a pop-

ular tool to pass down the lessons after the Great East Earthquake, however these systems have been pointed out some several issues, such as dramatically reduced number of accessing. In addition, many of the archived stories were too much focused on the listens “how to evacuate” that the precious local pluralistic stories were left out. From the previous research, Sasaki (2016) designed “collaborative” place to generate pluralistic stories of the evacuees from the town of Namie due to the TEPCO’s Fukushima No.1 Nuclear Power plant. Sasaki’s paper concluded that the complex interaction within the collaborative place helped generate various stories, yet it is unclear why the stories have generated. Therefore, the paper analyzes and clarifies the mechanism of its generativity process by using E.Goffman’s perspective on dramaturgy which includes interaction ritual of role distance. As a result, the collaborative place holds multiple layered audiences and meets various roles freely by having intimate relationship between the performer and audiences, to generate pluralistic stories which could keep a distance from the media representation of a “typical”evacuees.

## 1 はじめに

東日本大震災後に開始された次世代への警鐘を目的とした地域情報のアーカイブ活動には、以前から複数の問題が指摘されてきた。被災3県（岩手県、宮城県、福島県）で開始された54団体の活動は、人手不足、資金不足、震災記録の利活用の問題をかかえ、2012年時点で28団体が活動を休止または閉鎖している（永村ら、2013）。収集された震災の教訓や被災者の声が死蔵され、次世代に届きにくい状況である。

これに加えて、近年、多くの震災アーカイブが「あの時、どう避難したのか」という被災上の教訓の伝達に焦点を当てすぎており、その土地に生きた人々の多面的なライフストーリー<sup>(1)</sup>が省略されているとする指摘が現れた（Sasaki and Sakurai, 2015；佐々木, 2016）。結果として、避難者たちは、自身らにとって重要な出来事には関心が持たれていないという違和感をもつとされる。またその一方で、賠償金受給等のメディア報道で社会の重荷になる負い目を感じるなど、避難者としてのスティグマを背負うことも重なり、被災者達の多くは自らの声を閉ざして生活する状況にあるという<sup>(2)</sup>。この一連の先行研究の分析は、「教訓」に対する画一的な着目やメディアが構築する支配的な表象が個人の物語の表出を抑制していると位置づけるものであり、潜在的に大きな展開可能性があるものと本研究では考える。

しかしながら、先行研究の分析は、多面的なライフストーリーの生成プロセスの理論化がまだ十分ではない。佐々木（2016）では、福島第一原発事故で避難を余儀なくされた福島県双葉郡浪江町民に焦点をあて<sup>(3)</sup>、多面的なライフストーリーの生成を実際に試みている。「協働」の場を設定することで、その中での相互行為の中から多面的なライフストーリーが語られうることを実証的に示しているが、なぜその結果が得られるのか等は明らかにできていない。提案された手法を実践的

に活用していくには、協働の場と語りの変化の関係について理論的に把握していく必要がある。

本研究の目的は、佐々木（2016）では不十分であった多面的なライフストーリーの生成プロセスの理論化を行うことである。その手法として本研究では、佐々木（2016）で行われた実証手続きのデータと、ゴフマンのドラマツルギーを基礎とする。ゴフマンへの着目は、もともと佐々木（2016）に含まれていたもので、ここでは、ゴフマンのドラマツルギーを基礎とした「協働の場」の設計が試みられている。問題は、この設計が、これまで語られてこなかった多面的なライフストーリーの生成にどのように結びついたのかの詳細な分析が欠けていることであり、これを補うのが本研究の作業である。

本研究の構成は次の通りである。まず第2節では、先行研究の佐々木（2016）の議論を要約する。第3節では、協働の場におけるライフストーリーの生成を理論化するため、ゴフマンのドラマツルギーの主要概念を整理する。第4節では、その論点に基づき、ライフストーリーの生成のプロセスを解釈する。以上の分析をもとに、第5節では議論を行う。

## 2 先行研究

佐々木（2016）は、固定的な被災者像に当てはめられがちな語り、つまり、「震災」や「教訓」、「防災」の文脈の語りからこぼれ落ちてしまう多面的なライフストーリーの生成を目指す実践的研究である。協働<sup>(4)</sup>の概念を取り入れた場をつくり、浪江町避難者を対象にライフストーリーの収集を行った。

佐々木（2016）の議論は、「物語」に対する積極的評価の点で特徴がある。その議論と基礎的な用語法をまず以下に整理する。本研究においても、同様の観点に立ち、これらの用語を用いる。

佐々木（2016）では、単なる教訓の収集保存

に対して、物語が人をつなぎ、新たな物語を生むことで継承に寄与するという考え方を、やまだ(2007a)に依拠して生成継承性<sup>(5)</sup>と呼び、継承のあり方を評価する際の重要な観点と位置づける。また、佐々木(2016)では、複数の新たな物語が生まれる可能性を持ったライフストーリーを、やまだ(2007b)に依拠して「多元的なライフストーリー」と呼んだ。

佐々木(2016)では、多元的なライフストーリーが存在することで聞き手との接点が増し、聞き手が共通点を見出しやすくなることを評価する。そのことから、我がこととして関連性を見出すことができるため、より深く感情移入できるとする。さらに、大惨事のみならず平常時のライフストーリーを収集することで、平時と有事の差異がわかるとする。固定的な被災者像に当てはめられがちな語りや表象、または教訓のみをアーカイブするだけでは、これらの効果は期待できない。多元的なライフストーリーは、聞き手を触発し、生成継承性につながる語りとして重要であると位置づける。

佐々木(2016)においては、多元的なライフストーリーの生成は、支配的な物語から解放され、別様の語りを語ることを可能にするものである。物語が多元的であることで、より多くの人々が出来事を個人の記憶として残すことができ、また、当事者にとっても、自己の物語を回復することができるとする。

次に、佐々木(2016)の実験手順を要約する。用いられた「協働」の場は、いわば対話の場であるが、他者と出会い、他者と連携しやすくすることで自発的な語りを促す場として設計されている。佐々木は、語り手たちに主体性を持たせるためにギャラリー席を設けた。また、それぞれのライフストーリーを語りやすくするため、同級生、近隣住民、親戚などの親密性を持った者同士／複数の登壇を可能にした。このオープンな場では、ギャラリー席で順番を待つ語り手が他のインタ

ビューを聞き、情報を共有することが可能である。質問者との1対1の対話ではなく、既に確立されたコミュニティの人々と自由に語るかたちに近く、ストレスが小さいことが期待される。

佐々木自身は、質問者と聞き手役を担当している。ギャラリー席で観覧するオーディエンスも聞き手として参加している。また、語り手に対する聞き手が次の語り手になる順繰りの仕組みをとった。この協働の場のセッティングの特徴は、コミュニケーションの場でオーディエンスを変えれば別様の語りが生じるというゴフマンの演劇論的アプローチ(以下ドラマツルギー)を応用したことである。

佐々木(2016)は、この協働の場を用いて、福島市笹谷東部仮設住宅で3日間、浪江町避難者たちの語りの収録を行っている。その収録の手順と結果は以下の通りである。

- ①集会所に簡易スタジオ(ステージ)を設営して、動画と音声を記録した。
- ②スタジオを囲むギャラリー席(オーディエンス)を設けた。順番を待つ語り手者たちがそのままインタビュー収録を観覧できるオープンなスペースを確保した。
- ③「孫の世代まで浪江の記憶を届けよう」(DVDにまとめ図書館に寄贈する)と事前に広報し、後世に伝えたい個人のライフストーリーを収録した。
- ④語り手は1人または2人、自由な形式でインタビューを受けた。
- ⑤質問者である著者(世代間インタビュー<sup>(6)</sup>)は、「浪江での忘れられない思い出」や「人生の節目の話」、そして「震災の話」について質問した。

その結果、以下の3パターンのライフストーリーが生成され、生成継承性が見られた：①転機や回復が見られた対比の語り、②負をポジティブ

に捉えたユーモアの語り、③人生の総ざらいとしてのカタルシスの語り。これらのライフストーリーが生成した理由は、協働の場の構成に関係すると思われた。すなわち、ギャラリー席での参加人数や複数の登壇者の関係性、聞き手が語り手になる順繰りの仕組み等が、複雑な関係性を産出させる舞台設定であったからだと考えられた(図-1)。また、参加者が慣れ親しんだ者、経験を共有する者であったことも、多面的なライフストーリーの生成に寄与したものと考えられた。

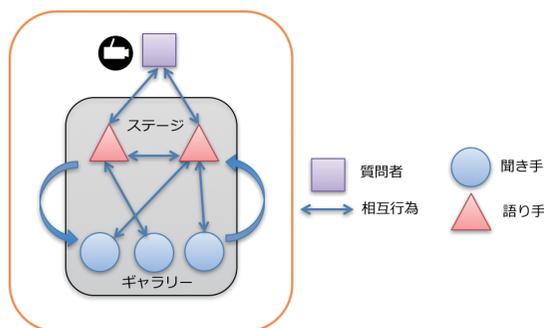


図-1 協働の場における相互行為

しかしながら、佐々木(2016)では、協働の場で繰り広げられた相互行為の複雑さに言及するのみであり、なぜこれらの相互行為から多面的なライフストーリーが語られるのかは明らかにされていない。さらに、インタビューのセッティングを変えることで(ここでは協働の場)、語り手の語りが増えることが確認されたものの、相互行為のメカニズムは明らかにされていない。このセッティングを実践的に応用するためには、協働の場と語りの変化の関係について理論的に把握する必要がある。

次節以降では、この問題を検討する。

### 3 ゴフマンのドラマツルギー論の主要概念

本節では、協働の場におけるライフストーリーの生成を理論化するため、ゴフマンのドラマツル

ギーの主要概念を整理する。まず「配置」の概念を整理し、それを基礎とする「役割距離」の概念を説明する。この上で、役割距離によりコミュニケーションが促進されるのかどうかという点を確認する。

#### 3.1 「配置」

協働の場では、登壇者の語りが終わるごとにギャラリー席から拍手が沸き起こった。この相互行為をドラマツルギカルに分析すると、チームが働いたと解釈できる。「チームとは、一つのまとまりあるルーティーンを演ずるのに協力している一組の人々」である(Goffman, 1959=1974: 93)。例えば、パフォーマーがパフォーマンスに失敗しても、オーディエンスが失敗に気づかないふりをする「察しのよい無関心」を貫いたり、適切なフォローを入れる「保護的措置」をしたりすることで、お互いにとって落ち着きの良い自己アイデンティティが、共同作業を通して維持されることになる(Goffman, 1959=1974: 270)。つまり、オーディエンスの拍手は、登壇者(パフォーマー)をその気にさせる適切なフォローとして働いたことになる。さらに、登壇者の語りにならずに、笑いを入れることで、お互いにとって落ち着きの良い自己が保たれたことになる。このように、チームが形成された場合、相互行為参加者の互いの配置状況によって行為は異なってくる。

このように理解すると、語りづらい状況に置かれていた語り手たちは、配置の選択肢が広がったことで別様の語り方ができるようになったと解釈できる。実際に、協働の場では、聞き手や語り手が入れ替わったり、複数になったりと、自由な配置を構成しつつもチームが保たれていた。詳細な分析は次節で行うが、協働の場は、カメラやギャラリーを含め、様々な主体が多層に配置され、チームパフォーマンスが形成された場であった。

### 3.2 「役割距離」

配置の変化により語りやすい状況に移行しようという点を説明するため、行為を演技として捉える考え方を整理する。ゴフマンは、パフォーマンスという言葉を一組の特定の観察者たちの前に断続的にいる期間に生じ、かつ観察者たちに何らかの影響を及ぼすある個人の挙動全体（Goffman, 1959=1974：24）と定義している。

協働の場では、チームを形成し、フォローし合いながらライフストーリーが語られた。この際に演じられるのがゴフマンによる「状況づけられた役割 (situated role)」である。木村 (2007) は、ゴフマンが主題化しなかった状況の定義について以下のように述べている。「状況の中に投げ込まれている個人は、それぞれ複数の関心や動機・パースペクティブをもっているにもかかわらず、目の前で進行している『事柄』の同一性について、『明白な同一の理解』（＝状況の定義）に迅速に達してしまうという事態であり、人々はその状況の定義を正確に査定し、それに従うかたちで自己呈示や印象操作へと囲い込まれている」。その際、状況の中にいる人々は、「状況の定義」を共同で維持するために、相互行為のなかで様々な役割を演じることになる。「状況づけられた役割」とは、「状況の定義」を維持するために相互行為の中で演じられる、こうした役割のことを示している (Goffman, 1961=1995：100)。ゴフマンは、「個人が状況にかかわりのある活動の回路の中で演じる役割は、必ず個人に関する何かを表現しており、個人や他者は、その何かから、その個人についてのイメージを形づくる (Goffman, 1961=1995：100)」と述べ、状況づけられた役割を演じることは、「状況の定義」を維持することだけではなく、個人にとっては自己呈示や印象操作の手段にもなっていることを示唆している。ゴフマンの状況づけられた役割に焦点をあてることで、個人は常に社会的状況に拘束され、社会的役割のなかでも自己を演出し、自己呈示を行っていること

を浮かび上がらせることができる。この際、完全に社会的役割に従属するのではなく、状況の中で査定し、行為することで、その役割から距離をとっている。ゴフマンは、これを「役割距離」と称した。役割距離とは「個人とその個人が担っている想定される役割との間にあるこの効果的に表現されている鋭い乖離」のことであり、「個人は、実際に、その役割を否定しているのではなく、すべてを受け容れるパフォーマンスにとって、その役割のなかに当然ふくまれていると見なされる虚構の自己を否定しているのである」 (Goffman, 1961=1995：115)。

協働の場での相互行為の把握には、多面的なライフストーリーを創生させた要因を、様々な役割を同時に担う個人のあり方として捉えようとしたゴフマンの役割理論を用いて考察することが必要である。役割距離概念によって、個人の多面的自己がどのように扱われているのか明らかにできる。

協働の場の相互行為では、与えられた課題を遂行するために、多面的な役割が発生したと言える。例えば、次の事例があった。語り手の女性が亡き夫の思い出を語っていた際、突然、感極まり涙を流しながら、嗚咽をはじめた。ギャラリー席からは「一緒に頑張りましょう」とフォローの声が入る。この時点で別の役割とシナリオが作りだされたことになる。このシナリオの変化をゴフマンは転調 (keying) と定義しており、別のパフォーマンスに変更されていくことについて、「傷つきやすさ (vulnerability)<sup>(7)</sup>」がつかまとうことになる」と相互行為の壊れやすさと柔軟性について強調した (木村, 2007)。必ずしも行為者の意図したとおりにならないのが、ドラマツルギーの描く現実であり、傷つきやすさという所以でもある。例えば、被災者／避難者たちの声を収集する状況において、カメラを向けられた当事者たちは、メディアに期待される被災者／避難者像を演じてしまう場合がある。しかしながら、協働の場の配置では、状況を変えると、これらの支配的な表象と

は異なるオルタナティブな語り（多元的なライフストーリー）の生成を確認できた。このように、行為を演技としてとらえるドラマツルギーの観点からは、「演じる自己」が多元的に存在しうることについて理解できる。参加者にとっては、自己の多元性や自己の多様な物語の回復にもつながる。

### 3.3 役割距離とコミュニケーションの促進

岩田（1988）は、役割距離の意義を「創発的自己の多元的要求充足にかかわる存在証明」と述べ、個人の多元的な表出が社会を改変していくエネルギーに寄与すると強調している。本研究では、協働の場における、継承のための語りの収録行為を、社会を改変していくエネルギーと捉える。そして、語り手に生じた多元的な役割と、その役割が語り手に与えた効果について相互行為分析を試みる。

まず、ゴフマンが役割概念の説明で用いた外科医の事例から、役割距離に関するコミュニケーション効果を紹介する：「手術中の主任外科医が緊迫したチームの緊張を和らげるためにジョークを飛ばした」。この行為は、チーム全体の役割が円滑に遂行されるために、リーダー自らが役割距離を表現したのである（Goffman, 1961=1985：138）。このような潤滑的な役割をもちこめるのは、上位者の特権である。あくまでもこの多元性は、主任外科医として手術が成功するためにとる役割、つまり主任外科医が演じなければいけない暗黙の役割として、避けられない振る舞いの一つであると解釈することができる。しかし、冗談を言うという主任外科医の役割を演じる際、自己を動員したり、統合したりする必要がある。その際、チームメンバーがその冗談を受け入れる配置が整っている場合に、冗談を言うというパフォーマンスが生じる。そこには、外科医がどのように自己呈示するか複数の選択肢が現れていたことになる。ゴフマンは、この状況を「自己の同時的な多元性」として「多元的役割演技者」の現れと言及している。すなわち、外科医は「一つの活動シ

ステムに積極的に参加しているときでも、「多くの特定の活動システムを横断している他の事柄」、「関係」、「多元的な状況に関わりのある活動システム」、「行為の規範保持」に同時に従事せざるを得ない（Goffman, 1961=1985：159）。

協働の場では、「孫の世代に届けよう」という共有された目的のために、円滑なコミュニケーションをとろうとして、フォローなどのチームパフォーマンスが行われた。さらに、ギャラリーやカメラの配置による多層的なオーディエンス構造によって、語り手たち（パフォーマンス）は、多元的な役割を演じ、メディアにより設定された避難者役割から距離を取ることができた。「次世代に語り継ぐための物語を発現する」一連の過程をコミュニケーションとして捉えると、役割距離の確保はこのコミュニケーションの促進に有効であった。

## 4 考察

本節では、前節で議論したドラマツルギーの主要概念に依拠し、協働の場におけるライフストーリーの生成と役割距離との関係を整理する。また、カメラの役割を説明する。

### 4.1 役割距離とコミュニケーション

#### 4.1.1 古老役割の事例

はじめに、古老役割の事例として、80代女性Rさんの農家への嫁入りの語りを取り上げる<sup>(8)</sup>。Rさんは、その日を鮮明に覚えていた。本人抜きでとり行なわれた結納について、ユーモアを交えて軽快に語った。

R：学校からの帰宅後仏壇に立派な化粧箱に入った嫁支度のための帯と履物、金一封みtainな（笑）水引かかった封があげられていたので、父親に今日何かあったのかを聞くと、今日はRの返事があったんだというので〔結納〕だったと言われた。なんだか悔しくて涙

がこぼれてきたよ。自分の結納にも立ち会えなくてね、いや私は残念というかなんと言っていていいやら（笑）。一言でいいからね、こんなことあるんだとせめて知らせてもらいたかった。気持ちも整理つかないでしょ、一生のことだものね（大笑い）。そんなんで、両家の親同士で決めちゃって、本人ほったらかしにして、そういう時代だったの。いや、私もがっかりしたっていうか（笑）、おかしかったよ（笑）。はっきり顔もわからないでね。今の父ちゃん（夫）、映画観に行こうだの、何の誘いも無いんだよ。まあ、現在の世の中にしては、ちょっと外れてるよね（笑）。

だから現在、私は時々話すの、「あの時どうして、ちょっと映画観にいこうだの、1回くらい誘っても良かったんじゃないの」っていうと、照れくさそうに、「こんな良い父ちゃんだものよ良かったべ」っていうんですよ（笑）。  
質問者：実際初めて会ったのはいつでしたか？

R：結婚式の日ですよ（（微笑み））。

Rさんの場合は、質問者と聞き手が語り手の孫の世代にあったことも、古老を演じるきっかけになったと考えられる。Rさんはこの配置によって、孫に継承する際の表現（口調と内容）を駆使し、創発的に古老という役割を演じたと捉えることができる。古老とは、昔のことや故事に通じている人生の大先輩であり、絶対的な説得力を持つ長者的存在である。その例として、「そういう時代だった」や「現在の世の中にしては、ちょっと外れているよね」などと現代の若者に向けて問いかけている。Rさんは古老という役割によって過去の出来事や自己との間に距離（客観性）を保ち、語りづらい体験談も古老役が捧げる「昔話」として、語る事ができたものと筆者は捉える。すなわち、辛い体験をした過去の自己から距離をとることができ、結果的に協働の場で新しい自己を獲

得することができたものとする。そして、避難者としての語り手がわざとユーモラスに語ることで、いわば苦しい経験の文脈から逸脱し、自嘲的に表現するに至っている。本設定の役割配置に関する自由度が効果を発揮し、避難者役割から距離をとることに成功している事例であると思われる。

#### 4.1.2 補聴器的役割の事例

協働の場での語り手たちは、ギャラリィ席で登壇の順番を待ちながら、他者の語りを聞く。当初は質問者が語りを引き出していたが、この順繰りの仕組みにより、徐々に段取りが学習され、質問者なしで、語り手同士、あるいは語り手とギャラリィの聞き手だけで進行された。登壇者FさんとDさん（同級生）の下記事例では、Dさんは耳が遠いFさんのために質問者からの質問を繰り返し、Fさんに伝達している。時には、DさんとFさんの掛け合いの語りも生まれた。

心の支えは？（質問者）

D：心の支えになったのは何？職業？

F：そうだね。働くって言うのが、心の支え。姑もいたけど、その人たちもみなきやいけなから。普通の人なら、もうとっくに居ない。  
D：居ない居ない。

F：言って悪いけど、私は大きな百姓の娘で、浪江町でも2番目に財産がある家で。だから、くよくよしないの。そして、親もみなきやいけないうことで、2人看取って。自分の家を建てて、移ったの。苦労しか無い。けど、仕事をやっているとね、楽しいのね。それが支え。うちの旦那がそんなでも、仕事に行くと皆良くしてくれて。くよくよしない。借金借金でも。毎回催促ばかり。何百万、何千だから。

D：あら。

F：そうしていたの。

D：借金を返済して。

F: そう, 自分でも家建てて。  
 D: 体を粉にして, 働いたのだね。  
 F: ホント苦労したのだ。それでも, こうやって, ニコニコしているから, 苦労していると思えないって皆に言われるのだけど。  
 D: 私はFちゃんのこと知らなかった。  
 F: 皆にニコニコしていたから,  
 D: うん。苦労しているとは分からないね。  
 F: まさかお店ではぶすつとする訳に行かないでしょ。はい, いらっしゃいって, ニコニコしなきゃ。お客さんはこないでしょ。暗い影出さないで。けど, お客さんにもしかられたことあって, トイレで泣いたりしていたな。  
 D: そういうことあるわな。

登壇者2人の語りでは, 質問者に代わって, 気のある親友同士や同級生同士が直接質問することで語りが進められた。DさんとFさんの事例では, 2人の語りは漫才のように繰り広げられ, Fさんは亡くなったアル中の夫の話といったプライベートなライフストーリーを語り始めた。一方で, Dさんは, Fさんのために質問者の声を届ける補聴器的役割を担っている。質問者に代わり, DさんがFさんに直接質問する積極的場面もみられた。これはコミュニケーションを円滑に促すためにDさんが取った補助行為である。協働の場の配置が自由度の高いものであったためにチームが形成され, 新しい役割が生じたものと思われる。予定とは異なる補聴器的役割を率先的に遂行することでFさんの語りを引き出されたものと位置づけられる。

#### 4.1.3 カウンセラー役割の事例

Kさんの場合では, カメラの前に一人では恥ずかしいということで, ご近所同士で仲の良いRさんがカウンセラー役としてKさんの隣に座った。Kさんは, 淡々と自分の生い立ちをモノローグで語った。ギャラリー席も引き込まれるようにうなずき, 息をのんでKさんの話に耳を傾ける。以下

は, 涙ながらに語り終えたKさんの話の後の, RさんとKさんの会話である。

R: これからもよろしくおねがいます。手を取り合ってね。元気にやっていきましょう。  
 K: 浪江には帰りたくても帰れない。うち(家)も土地も, 若い人たちから, 帰れないからねって言われています。家は, うちの人と一緒に作った家です。でももうそこには戻れないからねって言われています。孫たちは学校も福島だし, 福島にばあちゃん住むよと言われました。これから福島で, 自分の住む家を若い人と一緒に, 探して作って, これからの人生を過ごして行きたいと思います。今は若い人にもばあちゃんばあちゃんっていってもらえるし, ありがたいです。

皆さんと一緒に, どこまでもゆけるわけじゃないよと若い人には言われているけど, 早かれ遅かれ, 皆さんとの思い出を胸に, 今は自分の道を探したいです。

R: こうやってね, 隣同士で居れると思います。一緒に居れたら幸せだよ。力を合わせて, 楽しく暮らして, これからも頑張っていきたいとおもいます。

K: 先のことはおいて, 今, 今日明日, 一日の生活を楽しく過ごしたいと思っています。

R: 一日を頑張らしましょう。

K: いや, もう, 何しゃべったのだから, 頭がぼっとしてわからない。

R: ありのままをしゃべればいいのだよ。これからもよろしくね。

ギャラリー席では, 終始うなずきやため息があった。語りの最後には拍手がわき起こり, 舞台(語り手)はオーディエンスと一体となった。Rさんをはじめ, ギャラリー席はサポーターやフォロー役になったことで(保護的措置), 共同作業により語りが構築されたと理解できる。Rさんの

存在が与えた安心感や、ギャラリー席がオーディエンスとして保護的措置をとったことが、語りの促進に効果的であったと筆者は考える。この際のチーム形成によって、Rさんは新しい役割（カウンセラー）を読み取り遂行することができたものと思われる。すなわち、RさんとKさんの語りでは、この役割の配置の効果があったと思われる。

#### 4.2 カメラの役割

このセッティングでは、複雑な相互行為を発生させた要因の1つにカメラの配置があったとも筆者は考える。カメラはここで2つの効果を与えた。

第一に、カメラの設置は、各自の語りが記録に値するものであることを印象づけた。語り手は、カメラの設置により、その場をドキュメンタリー映画の制作現場のように感じたと思われる。孫の世代に浪江の記憶を届けるという課題の遂行と、カメラの存在により、そのライフストーリーに正当性が付与されたとも位置づけられる。通常、気詰まりや語りづらさの原因とされる報道カメラとは違い、語り手たちに安心感や親密感を与え、積極的な語りを促進する役割を果たしたと考えられる。

第二に、カメラは孫役を担うことで自己表現を促す道具としての役割を果たした。単に多面的な役割を創出させただけでなく、カメラもパフォーマーの一人、もしくは語り手の孫役等として存在した。つまり、語り手たちは、カメラの先に将来の浪江を担う孫やその世代がおり、耳をすまして参加者たちの語りに聞き入るであろうことを前提に、ライフストーリーを語ったのであり、カメラは世代をつなぐパイプとしての役割を果たした。カメラへの語りは、生成継承性を伴って次の世代に届き、新しい価値を創出していく。例えば、Pさんは、収録2日目、3日目に参加し、3日目には姉の形見の着物を縫い直したという半纏（はんでん）を着てきた（表現行為）。ここには、孫やその世代にメッセージを残す意図がある。こうした際、聞き手が同じ空間に不在であっても、カメ

ラの存在により、多面的な語りが促進された。以上をまとめると、協働の場の参加者たちにとって、カメラは、記録者としての役割を超えた存在であったと位置づけられる。

## 5 議論

コミュニケーションの促進の観点から、各役割距離の問題を改めて考える。

語り手はユーモアを交えて古老役割を演じ、過去の自己や避難者役割から距離をとった。それにより、次世代の浪江に記憶を届けるコミュニケーターとして継承の一助を担った。複数の登壇者の場合、既に多面的な関係性が生じている。一方が見守り役や補聴器役となり、聞き手にまわることによって全体としてチームが形成される。この複雑な関係性の中でコミュニケーションの促進が図られた。DさんとFさんは、同級生同士という関係性から補聴器役と語り手役という役割分担が行われ、豊かな語りが生み出された。ドラマツルギーの視点から解釈すると、様々な役割を取れることによって、シナリオ遂行のための様々な相互行為が生まれ、結果として様々なチームが構成される。同時に、様々な自己呈示が可能になるとも解釈できる。

元々親しい者同士が結びつけられていることも、即興的に役割距離の確保に結びついた。Rさんの例1つを取り上げても、古老とカウンセラー役割の二役を演じており、多元性を確認できる。また、Rさんの多面的な語りの発現には、ギャラリーやカメラの背後の将来世代など、多層的なオーディエンス構造が影響したと考えられる。パフォーマンスが失敗したり、ふいにシナリオが移行しても、それをフォローする人材の層は厚く（チーム形成が可能である）コミュニケーションは進展した。

通常の1対1のインタビュー形式では、多層性がなくチームパフォーマンスを形成できない。協

働の場で同じシナリオを共有した人同士では、ギャラリーや語り手からのフォローがより生まれやすくなり、安心感が増し、コミュニケーションが促進される。いつものお茶のみや井戸端会議の再現であり、この慣れ親しんだ空間によって、語り手の語りが活発になったと位置づけられる。

また、カメラという道具立てが加わることで、オーディエンスがより多層になった。親密者同士（ある程度お互いのシナリオを把握できる仲）で繰り広げられる語りの中には、まだ多元的な役割が眠っているのである。

以上の点を要約すると、協働の場は、パフォーマーとオーディエンス（＝ギャラリー）の親密な関係性やオーディエンスの多層性（＝目の前にいるギャラリーとカメラの向こうにいる将来世代）という舞台設定を備えており、それによって参加者の多元的な役割取得やライフストーリーの生成が可能になっていると言える。とりわけ、それらの役割取得が、メディアが設定した避難者像（役割）からの役割距離を実現している点が重要である。

## 6 おわりに

本研究は、協働の場における多元的なライフストーリーの生成のプロセスを、ゴフマンのドラマツルギーモデルを援用して考察した。その結果、パフォーマーとオーディエンスが配置される舞台のメカニズムがより明らかになった。ある程度のパフォーマンス性を促進することで、参加者たちは自由に役割を見出し、新たな語り方を発見することができたものと思われる。

ゴフマンのドラマツルギーには、状況づけられた役割により個人が自らの意志で演技するが、その反面、演技は舞台配置に拘束されるという課題的側面がある。しかし、舞台配置をうまくコントロールすることで、どのようなシナリオを生まれやすくするかをコントロールすることができるため、課題は克服可能とも見込まれる。佐々木

（2016）の協働の場は、役割の選択肢を広げるものであり、語りづらい状況に置かれた人々が別様の語り方をする可能性を広げるものであったと解釈できる。

これまでのアーカイブのインタビューでは、1対1の形式が多かったものに対して、佐々木（2016）の実験は、回答を多元的に引き出すインタビュー手法の検討としても斬新な面がある。また、回答を多元的に引き出す手法の理論的基盤は議論されてこなかった。すなわち、既往研究では、実践的に当事者の経験をどのように引き出し、その経験をどのように継承して行くかについては、まだ十分に検討されていない。

佐々木（2016）および本研究は、震災の文脈を前提とした分析であったが、ライフストーリーの生成プロセスにおける相互行為は、今後も一般に検討されるべき論点であると考えられる。生成継承性の実践に関する既往研究でも、多くは継承性の評価法に関するものである（e.g.西山, 2010; McAdams, 2001）。小林（1992）は、語り手と聞き手の関係が内容にどのように影響を及ぼしているか検討している。その結果、親密さが増すにつれて、一つの話は異なるストーリーとして語られることを明らかにしており、ライフストーリーを考えるときには語り手と聞き手の関係性を把握することが必要であることを述べている。効果的なライフストーリーの抽出のためには、相互行為に関する理解を深めるべきである。

最後に、個人の多元的なライフストーリーが記憶の継承に重要であることを改めて強調したい。佐々木（2016）の実験については、当事者がそれぞれの複合事象をどのように経験したかを語り直すことで、自伝の修復が行われたものと判断された（生成継承性）。物語性の中に、一般命題化された「教訓」の継承よりも、大きな継承力を見出すことができると表現できるかもしれない。継承力の概念については、厳密には長期的検討を要する論点である。評価軸が定まっていないため、

本稿では検証できず、今後の課題とせざるを得ない。しかしながら、経験がこのような多面的な物語の中にしか存在しないものであるとすると、個人史の語りが抑圧されてしまうのは適切でない。本研究のゴフマン理論を援用した分析は、その個人史の語りを導き出すために、従来の1対1のインタビューとは異なる役割の配置や聞き手の配置が有効であることを示したものと考える。

### 謝辞

本研究でご協力頂きました福島県浪江町の方々に深く感謝申し上げます。一刻も早い再建をお祈り致します。さらに、本論文を査読して頂いた社会情報学会所属の先生方、並びに編集委員を務める岩井先生には多大なアドバイスを頂き、本論文を仕上げることができましたこと感謝申し上げます。

### 注

- (1) 「多面的なライフストーリー」の概念は、やまだの議論(やまだ, 2007b)に基づく。また、第2節を参照。
- (2) 筆者は、2012年11月から2015年2月まで福島県福島市笹谷応急仮設、北環線応急仮設、県外などの借り上げ住宅で避難生活をする浪江町の人たちへ聞き取り調査を行った。例えば、2014年5月24日の20代男性インタビューで、当時仙台市で被災した20代男性は、「もう震災の体験談は聞きたくない。聞いても何と言っていいかわからないし、大体の話の筋は予想がつく。」と震災体験談に対する思いを語った。男性は、津波被害に遭遇していない被災者であるが故に、繰り返される津波関連の震災録や防災技術、備えに関する口述を聞かされることは「拷問だ」と語った。

筆者は、また、避難者たちの意識や実態の調査を行った。具体的には、メディアの受け手側調査として、アンケートと聞き取

り調査を行い、回答者の約70%が「テレビの報道では浪江町の本当の姿が伝えられていない」という苛立ちや違和感を感じていることを確認した。違和感を感じる対象例には、福島原発事故における絶望的なイメージを想起させる爆発や鼻血といった視覚表象があげられる。これらメディアが描く「かわいそうな被災者、避難者」の像は、メディアが震災を捉える際に支配的な表象として使用されている。

- (3) 震災前は、福島県双葉郡に位置する浪江町全住人は約21,500人だったが、その後全町民は避難生活を余儀なくされた。現在(2017年7月)、住民登録数は約18,200人にまで減ったが、2017年3月31日に「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」の避難指示が解除され、帰還した住民が現時点で約260人いるが、今でも2万人近い町民は、全国で避難生活を送っている。
- (4) 協働とは、英語「collaboration」の和訳であり、「ともに働く」という意味である。坂本(2008: 52)は、協働の定義として「自らが属する組織や文化の異なる他者と一つの目標に向けて互いにパートナーとしてともに働くこと」と述べ、協働で一つの目標を実現するためには困難や葛藤を乗り越える強い意志、他者との違いを乗り越えるための柔軟性やコミュニケーション能力が不可欠としている。多面的なライフストーリーの生成のために、この協働の概念が有効であると佐々木(2016)では位置づけている。
- (5) 通常generativityは「世代継承性」と訳されており、成人期の重要な精神発達課題として、「次の世代を確立させ、導くことへの関心」として位置づけられている(Erikson, 1950)。generativity研究領域において、物語論的解釈を導入したライフ

ストーリー研究者であるやまだようこは、generativityを「生成継承性」と訳している（やまだ，2000）。

- (6) 中川 (2009) は、ルバルスキー (Lubarsky, 1997: 143) のIntergenerational Interview (世代間インタビュー) を使った実践を通して、高齢者と若者間で構築されるライフストーリーの特性について考察した。若者は、高齢者からストーリーを引き出すような質問を用意するだけでなく、ストーリーを創り出す協力を行い、豊かなライフストーリーが生成されたという。佐々木 (2016) の協働の場でも、著者本人 (若者30代) と語り手 (65歳以上) の間に同様の関係が生じるようにインタビューを進行させた。
- (7) ゴフマンは「転換・転調」といったフレーム間の関係を通じて、絶えず別の状況定義に移行してしまう相互行為領域での認知に関わるもろさについて、「傷つきやすさ vulnerability」をもっていると述べている (Goffman, 1974: 376-79)。
- (8) 本研究では、「古老」は、年長者としての一定の社会的役割をもつものと位置づけている。

#### 参考文献

- Erikson, E. (1950) *Childhood and Society* Norton & Co. = (1955) 草野榮三良譯：『幼年期と社会 (中篇) 個性の成立』日本教文社
- Goffman, E. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life* = (1974) 石黒毅訳：『ゴッフマンの社会学 1 行為と演技—日常生活における自己提示』誠信書房
- (1961) *Encounters* = (1985) 佐藤毅・折橋徹彦訳：『ゴッフマンの社会学 2 出会い—相互行為の社会学』誠信書房
- (1974) *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience* Northern University Press
- 岩田若子 (1988) 「役割概念の再検討：E. Goffman における“役割距離”の含意」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』：社会学心理学教育学 No.28, pp.11-21.
- 木村雅史 (2007) 「E.ゴフマンの相互行為分析の展開—『フレーム分析』における「括弧いれ」概念の定義」『社会学研究』東北社会学会, 第81号, pp.23-46.
- 小林多寿子 (1992) 「〈親密さ〉と〈深さ〉—コミュニケーション論からみたライフストーリー」『社会学評論』第42巻4号, pp.419-434.
- Lubarsky, N. (1997) Rememberers and Rememberances: Fostering Connections with Intergenerational Interviewing, In Brabazon, K. and Disch, R. (eds,) *International Approaches in Aging*, The Haworth Press, pp.141-149.
- McAdams, DP., Reynolds, J., Lewis, M., Patten, A., & Bowman, PT. (2001) “When Bad Things Turn Good and Good Things Turn Bad: Sequences of Redemption and Contamination in Life Narrative, and Their Relation to Psychosocial Adaptation in Midlife Adults and in Students.” *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, pp.472-483.
- 永村美奈, 佐藤翔輔, 柴山明寛, 今村文彦, 岩崎雅宏ら (2013) 「東日本大震災に関する記録・証言などの収集活動の現状と課題」『レコード・マネジメント』 No.64, pp.49-66.
- 中川恵理子 (2009) 「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営』第34号, pp.99-112.
- 西山直子 (2010) 「世代間関係における Generativityの可能性—Narrative Approachの立場から—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第56号, pp.345-357.

- 坂本旬 (2008) 「『協働学習』とは何か」法政大学『生涯とキャリアデザイン』5号, pp.52-57.
- 桜井厚 (2012) 『現代社会学ライブラリー7：ライフストーリー論』弘文堂
- 佐々木加奈子 (2016) 「協働の場における多面的ライフストーリーの生成継承性に関する研究—浪江町避難者たちの事例から」『日本オーラル・ヒストリー研究』第12号, pp.167-189.
- Sasaki, K., Sakurai, M. (2015) Voluntary isolation after the disaster, *Journal of Disaster Research*, Vol.10, No.5, pp.687-692.
- やまだようこ (2000) 『人生を物語る1—生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房
- (2007a) 『やまだようこ著作集第8巻喪失の語り—生成のライフストーリー』新曜社
- 編 (2007b) 『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社